

オランダ日記(一)

『ももんが』一九八九年一月号

一九五〇

一九五〇年八月十日 木曜

午後十時少し過ぎに羽田の飛行場へ着く。航空会社の人荷物はこれだけですかと聞く。さうだと答へたら、このくらゐで旅行するやうにならなくちや駄目ですなと言つた。なんだか自分が手本を示したやうで少し得意になる。測つてもらつたら一切合財で八キロだつた。あと二十ニキロはただで持てるわけだが、シャツ類を少し持てば何も要らないと思う。

十二時發の筈だつたが、エンジンの具合がわるいから少しおくれるといふ。同じ飛行機に乗るらしい牧師さんや新聞記者らしい人が見える。

八月十一日 金曜

二時頃用意ができたといふので乗り込んだが、飛行場を一周してまだ具合がわるいからと言つて下ろされた。また待合室へ戻る。こんなに用心すれば大丈夫だとうちのものが言ふ。用意ができたといふので乗り込んだ。今度は飛び出した。もう明るくなつてゐる。時計を見たら五時だつた。

東京湾と房總半島が箱庭のように見えたが、それもすぐ後ろへ消え去つて、あとは海ばかり、海の波が見える。ゆうべ一睡もしなかつたのですぐに眠つてしまつた。毛布をかけてくれたのを薄々知つてゐた。目をさましたら十一時だつた。窓から雲とその間に青い海を眺めてゐたら朝食を運んで来た。卵を柔かく煮て崩したの上へペーコンをのせたのと、砂糖つき菓子パンとバターつきパン。ジュースと桃の缶詰。コーヒーは中将湯のやうな振り出しであまりうまくなかつた。めしを食つてから飛行機の便所へ行く。汽車のに似てゐるのは当り前のことであらう。そばに洗面所があつたから顔を洗ふ。朝食と順序が逆になつたわけだ。

間もなく案内嬢がレギュレーションだと言つて窓のカーテンを始めて行く。もう台湾だなと思う。果たせるかな、間もなく下降を始め

た。耳がじーんと痛くなる。かういつときは唾を呑み込むといいと寺田先生の随筆に書いてあるからやってみたが、矢張り痛い。チューインガムを呉れるのはこのことを考慮してゐるのであらう。「チューインガムの効用」といふのを考へ直さなければならぬ。昇り始めるときは耳の異変は感じなかつた。

十二時三十分頃タイペイ着。七十分とまるといふので下りる。飛行場の東と北に山が近い。その山の一部にシナ建築が見えて台北という感じが出てゐる。かなり暑い。ジェット機がしきりに飛んでゐる。一時四十五分頃出航。間もなくおやつを持って来たが、朝食が十一時だつたから余り欲しくない。ジュースだけ呑んでサンドウィッチと林檎はやめた。少しフランス語を練習しておかうかと思つたが、フィリップンの空気娘「エアガール」は佛語を解さない。おやつのできに枕をつけて来たので、それをして、それをしてうとうとする。約三時間で香港へ着くと案内してゐる、しばらく眠つて目をさますと鳥がたくさん見える。香港が近いらしい。土のあらはれた山肌が見える。ふと「きけわだつみのこゑ」の一場面を思ひ出した。

五時十五分香港着。少し雨が降つてゐる。飛行場のレストランへ案内された。昼食だか夕食だかを食ふ。めいめい注文して食へといふから野菜スープとローストビーフを頼んだ。これで六ドル位するらしい。これは航空會社が払ふのである。

香港を出てからもずつと雨で外の跳めはないし、そのうちに暗くなつた。十時近くなつて町の灯が見えて来た。マニラである。飛行場の時計は八時半くらゐであつた。税関などで一時間余りかかる。それから航空会社でホテルへ案内してくれる。その途中も雨が降つてゐた。海岸らしいところをドライブしてマジエスチックというホテルへ着く。羽田で見かけた牧師さんと同室になる。ポーレンだという。ドイツからアメリカへ渡り、日本にしばらく滞在し、今ローマへ行くところという。明日の飛行機も一緒らしい。東京のままの時計で十一時ねてしまふ。

八月十二日 土曜

昨夜は少し暑い感じがしたが、明方は浴衣一枚では少しひやひやする位だつた。六時頃目をさましたら牧師さんはもうゐない。なるほど昨夜牧師さんが、私は明日の朝近くの教会へ行きますが、できるだけ静かにしますから、と言つてゐたつけ。さうしてボーイに教

会を聞いてゐた。先生たちは何処でも教会を見つけて礼拝をするものと見える。

目がさめたからやがて起き出して躰を拭いたりなにかする。昨夜は気がつかなくなつたが家具がみんな籐でできてゐる。椅子や卓子は言つまでもなく、蚊帳の支柱もさうである。箆笥も籐を並べたものである。七時半だと言つてボーイが起しに來た。食堂へ行く。オレンジのジュースはすてきにうまかつた。コーヒーにトーストにハムエグスという月並なものを食つ。そのうちに牧師さんが歸つて來た。東京よりレス・ヒューミッドだという。さうだ。

九時三十分(マニラ時間)マニラ発。飛行機で日記を書いてゐたらインキが溢れて手とノートを汚した。圧力が低くなるためだらう。航空機用萬年筆というのを研究する必要がある。(進駐軍はボールペンを使つてゐたが、私はまだ持つてなかつた。)

海の上に細かい綿を散らしたやうに見えるのは何だらう。途中にある雲ではないらしい。一時頃になると陸地が少し見えた。それから雲が多くてよく見えなかつた。雲のないときは青々と木の繁つた土地が見えた。印度である。メアンダリングの面白い河なども見えた。

七時カルカッタ着。ここへ着く少し前にヤシの木らしいものが見え、さすがに南へ來た気がする。飛行場の草を刈つてゐる真黒い人が見えた。食堂のボーイさんもむろん印度の人で、もつと食はないかと言つて二度目のお皿を持つて來たが、さうは食へない。待合室から外を見るといろいろの着物の色が目につく。何か赤い花も咲いてゐる。スコールが通り過ぎたあとの情景で、飛行場の草は濡れてゐる。さつき通つたメチカル・インスペクションの部屋にガンヂーの写真がかけてあつて、その上へしなびた月桂冠がかけてあつた。

カルカッタは暑くて油汗がぞくぞく流れたが、飛び出すと涼しくなる。しばらく寝てしまつて、十一時半頃起された。パキスタンのカラチに着くのである。十二時頃着。約一時間半休んだ。熱い茶を呑む。サンドウィッチは食はなかつた、パンにもサンドウィッチにも蠅がたかつてゐた。真夜中で外は何も見えない。

八月十三日 日曜

昨夜はよく眠つた。薄明るくなつたので窓のカーテンをあけてみると、右手の方が赤くなつて來た。北へ進んでゐるわけだ。正しく

は西北である。時計はカルカッタ時間のままになつてゐるが、その八時半頃太陽が昇り始めた。眼の下に地形がはっきり見える。シリヤであらう。カルカッタ時間の九時をローマ時間の四時に合せる。コーヒーが出た。これはうまかつた。さつき合せたローマ時間の五時にイスラエルのリダへ着く。空港のレストランで朝食。庭に咲いてゐる花は日本と余り違はないのがいろいろ目につく。紅白の夾竹桃、日々草、えぞ菊の類、沢瀉草など。

約一時間でリダ発。畑に見えるのは、たつもろこしの如きもの、粟がらの如きもの、これらは枯れたやうになつてゐる。青いものもいくらか見える。リダを立つとすぐ地中海の上へ出る。九時頃（ローマ時間）島が見え出した。エーゲ海であらう。やがて多くの島が見えた。多島海の名に背かぬ。九時半頃おやつが出る。がらんどうの巻煎餅で長さ十五センチもあるもの三本ばかり、サンドウィッチ、クリームの入った菓子、それに唐辛子のかかつたマカロニ。ローマの近づいたことを想はせる。多島海の美しい景色を眼下に見ながら食つた。うまかつた。天気は非常によい。大体雲の上を飛んでゐる。やがて大きな陸地が見えた。例の牧師さんがキュプロスかも知れぬと言つ。

初め陸地が見え出したと思つたとき、実は陸地だか雲だか最初は分らなかつた。昨日もこれが中々分らなかつた。いま飛行機は西北に進んで居り、うしろから午前の日が射してゐる。この場合、行手の方に横たはつてゐる島は明るさが全体に大きくてグラデーシヨンが少いためによく見分けがつかないのである。雲のようにも見える。真上を少し通り過ぎてから振り返つて見ると、陰影がついて島ということが確かめられる。

十二時半ローマ着。旅券の査証に三千リラとられた。五ドルである。オランダ行の飛行機は午後四時なので暫く時間がある。例の牧師さんに別れ、バスで町へ出る。途中の並樹に白ペンキが塗つてゐるのは日本と同じ戦時中の名残であらう。コカコラの赤い大きな廣告がある。ローマの町を自動車の中から見ると、ライオンの口から水を吐いてゐるのが見えた。台石にエチプト象形文字があり、上の方にはラテン語らしいものが彫つてあつた。

航空曾社のオフィスへ着き、そこで暫く待つ。またバスで飛行場へ戻り、今度はKLM(オランダの航空會社)の飛行機へ乗る。四

時四十五分頃立つ。また坊さんと隣り合う。ローマから乗った人で、乗る前にパスポートがないと言つて大汗をかいてゐた坊さんだ。旅券は切符と一緒に航空倉社へ渡してしまひ、飛行機で返すと言つてあるのを忘れたと見えて、ふところを頻りに探してゐたあの坊さんである。アムステルダムへ行くといふ。

初めのうち雲が多かつたので、アルプスは見えないかと思つたが、段々雲がなくなつた。やがて雪をいただい高い山と、その間に雪だか氷河だか詰つてゐる谷が見えて来た。マッターホーンの尖つた峰は左手に見えた。これは案内人が教へてくれた。それから美しい湖水の上を通つた。備へつけの地図には航路と距離が印刷してあるので、時間を見れば今大体何処を飛んでゐるかが分る。それで見るとチューリッヒの湖水らしい。

スウイスを過ぎると青々と草の茂つた牧場が見えて来た。高度が低くなり牛の遊んでゐるのが手にとるやうに見える。褐色の屋根が所々に見える。美しい景色である。

午後八時十分頃アムステルダムへ着いた。旅券や荷物の調べは簡単に済んだ。その両替所で金を替へようとしたら、今旅券を調べた人が、出るとき外国の金に再度替へることはできないから余り多く替へないがよいと注意してくれた。忠告に従ひ二十ドルだけオランダの金に替へてもらつた。七十六グルデンなにがしか貰う。手数料五十セント。

航空曾社のバスで町のオフィスへ行く。飛行場を出ると間もなく風車のある景色が見える。いよいよオランダへ来た。KLMのオフィスへ行つて高くない宿を世話してくれと頼む。ホテル・ラインダースというのを紹介してくれ、自動車で送り届けてくれた。ローマから乗つたドイツ人らしい青年も同じ宿へ入つた。

高くない室といつて注文したのだから当り前だが小さな窮屈さうな室である。朝食つき七グルデンださうであるから安いには安い。一グルデンは約百円である。さつき両替所で貰つたオランダの紙幣と小銭をよく覚えなければならぬ。四角のニツケル銭もある。札には女王様のついたのがある。

長い道中であつたがその割に疲れてゐない。飛行機は汽車よりもよっぽど楽だ。金の動定をしたりして暫く休む。安い室だからむろんバスはない。共通のがあるかと思つて見廻したが見当らぬ、お湯で軀を拭いて寝る。寝たら蚊が一匹来た。蚊帳はない。それを退治

して窓をしたらあとは来なかった。ここは場末だと見えてひどく静かだ。

オランダ日記(二)

『ももんが』一九八九年二月号

一九五〇

八月十四日 月曜

眼がさめたので時計を見たら五時だったのでまたねる。今度眼をあけたら七時半だった。このボーイは英語、ドイツ語、フランス語を話す。あとでフランスへ行く下心があるからなるべくフランス語を使うことにする。朝食は大きなフロマーヂュを薄く切ったのとハムとソーセージ、うで卵、コーヒー。パンは白いのと黒いのが一枚づつと菓子やうに軽いのが一つ。白いパンは日本の四角な食パンと殆ど変りがない。コーヒーはむろんティーにしてもよいのだ。

科学史連合総会は今日の午後三時からだけれども、その前に會場を探しておかなければならないし、幹事のS教授にも會つておかなければならない。九時頃宿を出る。タクシーを頼まうとしたら「ノー・タクシー、サー」というので歩いて電車に乗って行く。何遍もきいて大学の有機化学実験室といふのを探し当てた。そこが受付になつてゐるのである。受付へ行つて幹事S教授の宿を教へて貰ひたいと英語で話した。すると代つて中年の婦人が出て来た。プログラムに書いてあつた受付主任のミスSといふ人だと直覺した。改めてS教授の宿をきいたら、お前は誰かという。そこで名乗をあげたら、日本は講和條約を結んでゐないから會議には出席できないといふ。科学史國際連合常任幹事S教授がいいと言ひましたと言つたら、駄目だといふ。とにかくS教授の宿を教へて貰ひたいと言つたら、ホテル・ポールンだと答へたから、その名と番地を書いて貰つた。そばに立つてゐた會員らしい中老人が「アイ・アム・ソリ・プロフェッサー」と言ふのに軽く會釈して其処を出た。

そのとき二三メートル離れた入口のところでいちぶしじゆうを見つてゐた青年があつた。私と一緒にその入口を出て、気の毒さうな顔をしながら話しかけた。その宿は9といふ電車に乗ればいいので、電車はあそこだといふ。その電車はさつき乗つて来たのだから分つてゐるのだが、有難うを言ふ。よつばと名前をきいておかうかと思

つたが、それは遺慮した方がいいと思つたから、あなたはこのコン
グレンストかとだけ聞いた。そしたら、さうぢやない、ここで物理
の講義をしてゐるものだと言へた。重ねて有難うを言つてこの青年
と分れた。

電車はそこからまだ一町余りさきである。9という電車に乗り、
カルヴァストラートのホテル・ポーレンへ行く。玄関できいたらお
部屋へ電話をつなぐと言ふ。恐る恐る電話へ出てS教授に話したい
と言つと、女の聲で「イル・ネ・パ・ア・ラ・メゾン」と言つ。
フランス語の作文がとつさにうまくできないから「メルシー」で電
話を切つた。受付のマトモアゼルが今のは教授夫人だと教へてくれ
た。

これはホテル・レストランなので玄関を出たところに椅子がいつ
ぱい並べてある。そこで待伏せすることにしてコーヒーを呑む。教
授の顔はまだ知らないのだけれども、さつき會場受付へ行つてみた
とき會員は胸に會員章をつけてゐるのを知つた。科学史連合の會員
章をつけてこのホテルへこれから入つて来る人はS教授であること
の確率はかなり高い筈なのだ。しばらくするとこの會員章の人がや
つて来た。このホテルの玄関をちよつと行き過ぎてから戻つて、そ
れから入つて行つた。この人に相違ないと直感した。あとから玄関
へ入つてさつきのマトモアゼルにあれがS教授ぢやないかとときくと、
さうだと言ふ。すぐに呼んで来てくれた。

S教授に會つて固い握手をした。前に手紙と電報で打合せがして
あつたやうに、科学史連合總會の方は出てよいので、君の報告をき
くことになつてゐるんだから、三時に第四會場へ来るやうにこのこ
とである。さつき受付へ行つて断はられたことを話したら、ヨーロ
ッパは複雑だというやうなことをちよつと洩らされた。S教授は名
前から生粋のフランス人でないことは想像してゐた。またホテル・
ポーレンへ宿をとられてゐることからポーランドかなとも思つたの
だが、自分はルーマニーだと言われた。十二時に近かつたので再會
を約して別れた。

開會まで暫く時間があるから何処かで休まうと思つて、ぶらぶら
歩き出した。中央停車場の方へ歩く。賑かなところである。本屋が
あつたから入つて、絵はがき十枚ばかりと「ソアール」を買ふ。驛
前に小さな公園のやうなところがあり、そこに傘を立ててその周り
へ椅子を並べた喫茶店がある。そこへ腰を下してコーヒーを呑む。

この爺さんフランス語は分らないらしいが、英語とドイツ語はどうやら分るらしい。向うの方は真赤なゼラニウムが沢山咲いてゐる。暫く休んではがきを書いたりしてから總會で読む報告の下読を始めた。日本の代表が出席できるなら日本の科学史界について短い報告をしたいと言つたのに対して、十分か十五分喜んで聞くといふ返事を貰つてあるからだ。さうして「總會」は「會議」とは一應別のものであるということも前以てS教授から言つて來てゐるのだ。

下読みをしてゐると誰かが自分の方へ近づいて來る心配がした。この町に俺を知つてゐるものはゐない筈だがと思ひながら顔をあげると、近づいて來た男は手帳やうのものを開いて自分は何かかプレスのものだといふ。さうして日本人がヨーロッパでしばしば受ける質問、つまり「あなたはシナ人か」を放つて來た。いや、日本人だと答へる。見物に來たのか、ときくから、いやどうしてそれどころぢやない、学会があつて來たのだと答へる。名前をきくから今読んでゐる報告に書いてあるこれだと答へる。オランダの印象はどうかといふから、昨夜着いたばかりでまだよく見てないが美しい町だと答へる。半分は眞実であるが、半分は儀禮である。昨日ちよつと見て來たローマの町の方がなんだか好きさうだ。それから今度は日本は七萬五千の警察予備隊を組織するさうぢやないか、第三次戦争の危険があるんぢやないかと言ふ。俺はさうは思はぬと言つてやつた。さうかといふやうな容子をした。俺はこれから學會で読む報告の下読みをしてゐるので忙しいのだと言ふ。写真をとらせてくれと言ふから、俺は写真は嫌いなんだ、それにそれほど偉い学者ではないんだと答へる。そしたら写真はとらなかつた。宿をきくからそれは教へてやつた。これぢや記事にもなるまい。警察予備隊が気がかりになつてゐることはこれで分つた。

二時少し前までここで休んでそろそろ出かける。9といふ電車はここから出るのである。電車を下りてから會場まで二町ばかりあるのだが、少し早いからゆつくり歩いて行くうちよつとS教授が反対側の通りを會場の方へ歩いて行くのが見えた。教授が此方側へ道を横切るところで一緒になつた。婦人ともう一人の三人連れであつた。婦人はS夫人、さつき電話でちよつと話した人であつた。挨拶をする。もう一人は動物学者であつたが名前を忘れてしまつた。日本の動物学者を知つてゐると言つてしきりに考えてゐたが、思ひ出せない容子だつた。三十年も前に會つた人の由。飯島博士でもあるだら

うか。それを言ってみようかと思つてゐるうちに会場入口で大勢の人に会つた。自分も数人の学者に紹介されたが、名刺をくれなかつた人は一々覚えてゐない。

總會の室は有機化学の階段教室であつた。会場で会長であるイギリスのチャールズ・シンガー博士、ユネスコのホルテザン博士、ブリュッセルのグローデン博士、同じくブリュッセルのペルセネール教授その他の人々に紹介された。ホルテザン博士はあなたのペーパーを読みましたと言つてゐた。これは總會へ前以て送つておいた自分の報告ともう一つのことであらう。

總會は会長の挨拶に始まり、前大會から三年間の連合の活動、會計報告等が幹事からなされた。會計報告では幹事のS教授が早口に読み上げ細かいことはこの書類にあるから見てくれといふので、みんな笑ひ出してしまつた。さうしてその検査役にさっきのグローデン教授ともう一人が指名された。二人はしばらくその書類を検査して「ボン」とか何とか言つて幹事へ返した。さうすると幹事は検査すみのことを書けといふ。「トゥージュール、エクリヴェー」と言つて、書く紙を探すつもりらしく厚い書類をめくつてゐるが、要らない紙が見つからないらしいので、自分の洋罫紙をその検査役の人に差し出した。日本の紙一枚がこんなことに役立ち、科学史國際連合の書類綴の中へ収められたのも自分には嬉しかつた。こんな風 realistically 実に和氣霽々のうちに進行した。

活動の報告の中にはシンガー夫人のビブリオグラフィーの仕事もあげられてゐた。夫人はこの方面では前から有名な人である。此の期の仕事としてしらべあげた科学史文献の分厚な原稿が披露された。またこの連合はユネスコから多大の援助を受けてゐるのであるが、その方の関係はホルテザン博士から報告があつた。

その次のところへ日本の報告を挟んでくれたのである。これは既にこの春作られてゐた總會のプログラムにはなかつたものであるが、會長シンガー博士及び幹事セルジェスク教授の好意によるものであり、深く感謝するところである。報告の要旨は次の如きものである。

この世界的な集まりに加はつて日本の科学史界につき報告をなし得ることは非常な喜びである。殊にこのアムステルダムにおいて。

それは二三百年前我々の鎖國時代におけるこの國と我國との密

接な関係を想ひ起させる。蘭学といふのは日本の科学の揺籃であった。もとより日本の科学といふものもあつたけれども西洋科学が入つて来るまでは健全な発達を遂げることができなかった。日本の科学といふのは例へば和算であり、これについては古くは菊池、藤澤、林等の諸博士の研究があり、もつと近いところでは藤原小倉、三上諸博士の研究がある。三上博士は國際科学史學會の會員であり、ヨーロッパ及びアメリカで出した著書もある。小倉博士は日本科学史学会会長であり、数学史及び数学教育について多くの研究がある。

日本における科学史研究の中心は日本科学史学会である。これは一九四一年に創設され初代会長は桑木博士であつた。博士は一九二五年東京に開かれた第三回汎太平洋学術會議に「日本の物理学的科学」について報告され、これは英文で印刷されてゐる。

日本科学史学会は「科学史研究」を刊行してゐる。戦争中杜絶したがその後復刊し最近十五号まで出てゐる。その中で発表された論文題名の英訳をここへ持つて來てゐるが適当な場所に印刷されることを希望する。

我々はイクス（國際学術會議）に復帰することができたので科学史においても仲間入りをしたく、今回科学史國際連合へ加入方をお願いした次第で、この学の発達と普及に我々も協力し得んことを希望する。

ざつとつかういふものであつた。これを讀んだら、当り前のことだらうが、一同拍手してくれたのは嬉しかった。これで役目の幾分かを果したやうな気がした。

次の議題は科学史研究と科学の哲学と協力すべきことに関するもので、この問題を研究するためにセルジエスク教授ほか四名の委員が推薦された。もう一つの大きな問題は次の總會を何処で開くかといふことであつた。アメリカで開きたい意見もあつたが、為替の關係でヨーロッパから中々アメリカへ行かれないというヨーロッパ側の反対が強かつた。ところがイスラエルの代表からイスラエルはこの會をイスラエルで開きたいことを公式に望んでゐるとの提案があり、賛成が成立して、次回一九五三年の會はイスラエルのイエルサレムと定つた。次期會長はジョージ・サートン博士が推薦された。因にサートン博士はこの会には來られなかつた。幹事は引続きセル

ジェスク教授にお願いすることになった。以上が總會の概要である。總會が終つてから自分はペルセネール其他の学者としばらく話した。ペルセネール教授は國際連合の機関誌の発行に携つてゐる人である。自分は持つて行つた「科学史研究」を同博士等に見せ、それはパリの國際連合へ持つて行つて提出することを話した。これの目録をこれから英訳または佛訳して送れと言ふので承知した旨答へた。なほペルセネール教授はセルジェスク夫人の本は日本語に訳されてゐる、夫人は文学者だと教へてくれた。

會場を出ると少しほつとした。電車通りまで行く途中に本屋があるので覗いてみる。主にオランダの本であるのは当り前だが、英語やドイツ語の本もある。飛行機で萬年筆のインキが噴き出してしまつたのを思ひ出してインキを買う。見たらアメリカ製だつた。ブリユーブラックの二オンス入り二十七セント。もう一軒のはシヨールインドウだけ見た。

電車通りへ出たら手押車の上へ舞台様のものを取りつけ、把手を廻すとそれに接續した種々の楽器が鳴つてゐた。いくらか哀調を帯びてゐると思つた。傍へ行つてみると把手を操つてゐるのは若者で、その傍にブリキの箱を持つた老人がゐて、何やら口上を述べてゐる。きいてゐると孤児のために御喜捨を乞ふと言つてゐることが分つた。さうして錢の入つてゐるブリキの箱を時々ガチャ／＼させるのは人を促すのであらう。

まだ時間が早いから町を見ながらぶらぶら歩く。9という電車について歩いて行けば賑やかな廣場を通り中央停車場へ行くことは分つてゐるから道をきかなくても歩ける。少し歩くと植物学のインスチチュートの前へ出た。その横の通りは今朝大学を探すとき一度通つたところだ。街路樹が鬱蒼と茂つて居り、研究所の構内にも木が多く植物学のインスチチュートにふさはしい。まことに橋の多い町だ。やがてちよつと廣い川を渡ると通りが賑かになる。また本屋があつたから入る。実は探してゐるドイツの本があるのだが、それはなかつた。

町を見ながら歩いてゐるとさつきのホテル・ポーレンの前へ出た。この辺は一番賑かなところらしい。そこを過ぎて少し行くと駅前のはやし賑かな通りである。そこに映画館があつて「若草物語」がかかつてゐた。目抜きで場所今頃これを出してゐるのではこの点は

日本よりも遅いなと思う。

そこから少し戻るとダムという廣場があつて、うしろに王宮がある。王宮であることは前に少し案内記を見てあるから分つた。王宮といつても今は女王様があるわけでなく、市民館になつてゐるさうだ。うしろへ廻つて見たら修繕をしてゐた。柵があるわけでも何でもなく、廣場に面していきなり建物があるのである。

今朝は大学を探すのに気をとられてどの電車へ乗つたのかで記憶がない。お巡りさんをつかまへて宿へかへる道をさかうと思つたが、そこらを歩いてゐるお巡りさんは見当らない。廣場の裏手の丁字路で交通整理をしてゐる巡査にワンニングストラートへ行くのをきいたら、ゴーストップをそのままにしておいて、2という電車の向うへ行くのへ乗るのだと丁寧に教へてくれた。

この國の電車は右側通行である。だから乗るとき日本のとちよつと調子がちがう。自動車もむろん右側だ。歩道を歩く人も右側を歩いてゐる。日本で近頃やつてゐる対面交通というやつはどういう理論に立脚するのか分らぬ。しかもそれが実行されず前より一層複雑化してゐる。

電車へ乗つて切符を買つたら十一セントだつた。ワンニングストラートを教へてくれと車掌に頼む。忘れずに教へてくれた。教へられたところで下りたけれども宿がどこだつたか分らぬ。考へてみたら今朝ホテルを出て大通りへ出たところに足場をかけて建物の手入れをしてゐるのがあつた。あの足場を見つければ分る筈だ。すぐ見つかつた。さうしてホテルへ歸つた。六時を少し過ぎたところである。

今朝ホテルを出て町へ行くとき、先づ空気を鼻につーんと感じた。これは涼しい証拠である。東京を立つ前にオランダの氣候表をしらべたらアムステルダムは八月の平均気温は十七度であつた。日本でこれに近いのは北海道の釧路であつた。それで大体北海道の八月くらゐかなと思つて來たら正にその通りである。自分はイミテーシヨンのパナマ帽を冠つて來たが、こんなのを冠つてゐる人は一人もゐない。帽子を冠つてゐる人は冬帽子だ。服も多く厚地のを着てゐる。スフのべら・・・な夏服などを着てゐる人は見えない。今日は東京と同じ服装つまりクレップのシャツと木綿厚地のワイシャツと薄い夏服ででかけた。むろん帽子はやめた。これで寒くはなかつたが、歩いて汗は少しも出ない。まことに爽かだ丁度よかつた。帽子で思

ひ出したのだが、ローマまで一緒に来た牧師さんは夏帽子と冬帽子を持ってゐた。なるほど旅慣れた人はあゝいう風にするのかも知れぬ。

晩の食事は料理だけでパンは出ない。ボーイが「ボワール？」とさくから「ドウ・ロー」と言ったら「メルシー」と言った。ところがたうとう水も持って来なかった。料理の細かいことは分らぬが別段変つたものとも思はれなかつた。定食で五グULDENのサーヴィス料五十セント。食事代はその都度拂ふ式である。

室へ帰つて金勘定。四角は五セント、丸い銅の五セントもある。銀の小さい丸いのは十セント、少し大きいのが二十五セント。札に赤い女王様のついた二十五グULDENというのがある。プリューの十グULDEN、茶色の一グULDENはよいとして、二グULDEN半という札のあるのは珍しい。

繪はがきを四五枚書き、日記を書く。躰を拭いて日本から持つて来た浴衣を着て、さつき貰つた總會の印刷物を讀む。セルジエスク教授が自分はルーミアニア人だ、ヨーロッパは中々複雑だと言つたのを思ひ出す。それでコングレスの方を傍聴させて貰ひたいという希望は断念した。教授がパリへ来ないかとさくから行く積りだと答へる。教授はいつパリへ帰るかときいたら、二十二日か二十三日だと言つた。その頃自分もパリへ行きたい。この宿は都心地区でないから静かだ。

八月十五日 火曜

昨日はよい天気だつたが、今日は少し雲がある。十時ごろまで葉書を書いたりなどしてゆつくりする。コングレスの行事にライデンの科学史博物館やハーレムのテラー・インスチチュートの見学があるが、これは會議の人たちとは違ふ日にゆつくり行くことにしよう。今日は少し疲れが出たから國立美術館でも見ることにして十時頃でかける。宿からすぐだ。入場料二十五セント、特別展覽七十五セント。十六世紀、十七世紀の画がたくさんある。十八世紀も少しあるが古いが多い。さすがにレンブラントは沢山ある。美術史の本などで見覚えのあるものもある。ずゐぶん大作もある。「夜の守り」という有名な画など幅が七八間もある。高さも五間くらゐはありさうだ。その中の剣を持った大守だつたかは少々貧相だ。「兜をかぶつた男」の兜の絵具を盛り上げた技法は獨特である。盛り上げたところに陰影がつき、金属の感じが而も鑄物の感じが実によく出てゐる。

る。どう見ても金属性の光澤としか思へぬ。大きな白い襟をつけた「織物組合員」の群像を見てみると、ジャック・フェーデーの「女だけの都」のモティーフを想ひ出す。「自画像」や「サスキアの像」も見た。

フランス・ハルスもかなりある。「男とその妻」という、木の根元に腰かけた夫婦の画は色の調子がいい。そのほかファン・ディックやファン・アイクやホベマやルイスデールなど。ファン・ディックやその他のこの國の画家でも刺繍のある衣裳や繻子の光澤などを描く技法は獨特のものではないかと思ふ。レンブラントの兜もこの系統であらう。

ホベマの「水車」も見た。ルイスデールになるとだいぶ傾向が新しくなる。水が瀬をなしてゐる「風景」は好ましい画である。そのほか初めて名をきく多くの画家のものを見た。宿の近くにパウルス・ポッターといふ通りがあるが、これは画家の名であることを知つた。かういふオランダのものばかりでなく、外國のも少しある。フラ・アンジェリコ、ティントレット、デューラーなどもあつた。デューラーなどは特別展覽の方にあつたのだと思ふ。それはベルリンの國立博物館から持つて來た臨時陳列だつた。

一時半頃までかかつて見る。繪はがきを少し買つて下の喫茶室へ入る。紅茶を頼んで何か菓子をくれと言つたら、ビスケットがいいかと言ふ。ビスケットといつても軽くふかふかしたので日本のビスケットから見るとまるで別物だ。繪はがきを見ながらゆつくり休む。勘定を一グルデン札で拂つたら八十五セントだと言つてお釣を十五セントくれ、「セルヴィス・セルヴィス」と言つて催促した。催促されなくてもやるのに。トイレットは何処かときいても「セルヴィス、セルヴィス」と言つてゐる。十セントやつたらトイレットは向うだと教へてくれた。きかなくても少し見廻せばすぐそこにあつたのだ。かういふ所のケルナーでもちやんと長い洋服を着てゐる。もう一度上へあがつて繪はがき賣場でオランダ案内を買ひ、繪はがきを少し追加した。

此処を出てかまはずにぶらぶら歩く。美術館の前に木立の茂つた小公園がありベンチが置いてある。川の向う側に赤いゼラニウムの咲いてゐるのが見える。いい加減歩いてからツェントラル・スタチオンと書いてある電車へ乗る。中央停車場前まで行けば昨日の通りにして宿へかへれるのだ。

驛前のキオスクで切手を買ふ。郵便局は中々見当らない。昨日うちへ航空便を出すのに切手を賣るおばさんに日本へ行く航空便はいくらかときいたら、傍にみた顔見知りらしい男と相談して五十セントだといふから五十セント貼つて出した。今日は別のキオスクできいたら二十セントだといふので、今朝書いたのに二十セントづつ貼つて出した。今朝帳場できいたら四十二セントだと言つてみた。それが本当なら今日出したのは航空便にならないだろう。ポストもそう見かけないが、昨日は中央停車場で出した。今日は何処へ入れようかと思つてゐたら、電車のうしろへついでゐる箱へ手紙を入れてゐる娘さんがあつたので、真似をしてそれへ入れた。なるほどブリーフカステンとか何とか書いてあつた。どの電車にもついてゐるらしい。念のためもう一軒のキオスクで「ソワール」を買つたついでに航空郵便をきいてみたら、やつぱり二十セントといふ。もつともこれはヨーロッパのことかも知れぬ。

昨日教はつた²といふ電車に乗る。まだ下りる所が分らないので、ワンニングストラートを教へてくれとフランス語で言つておいたが、どうも行き過ぎたらしいので其処で下りて戻つたら今朝行つた美術館の前へ出た。ここは宿から歩いて來たのだから、ゆつくり考へれば思ひ出せる筈だ。ちよつと間違へたがやがて分り、ひとりで宿へ歸れた。

この車掌は一般にフランス語は分らないらしい。ドイツ語が近いからドイツ語でできた方がいいやうだ。美術館の売場にフランス語の上手な娘さんがゐた。ファン・ホツホの複製をいくらかときいたら三グルデンだといふ。お釣を出して涼しい聲で「ヴォアラ・ムツシュ」それから「メルシイ・ムツシュ」。

「ル・ソワール」を見てゐると朝鮮のことは第一面に大きく出てゐる。國連軍がニキ口前進したとある。この「ソワール」はブリュッセルで出てゐるもので、一部二十セント、邦貨二十円に当る。八ページ又は六ページだが安くはない。朝鮮関係のところを切り抜く。

夕食後美術館で買つて來た絵はがきを見る。またオランダの案内書を読む。

オランダ日記(三)

『ももんが』一九九〇年一月号

一九五〇

八月十六日 水曜

八時までねた。起きながらシートが浴衣の藍で少し染まってるのに気がついた。水を通せと言ったのに、出発の前日に縫うやうな泥縄をするからだ。朝食後その苦情のはがきをうちへ書く。今日も曇で昨日ふり雲が濃い。窓から入る風が少しひやひやする。九時半頃小雨が降って来た。はがきなど書く。しばらくベッドでねる。眠りはしなかつた。

雨が降つてゐるけれども出かける。今日は市立美術館へ行く。これも宿の近くだ。こちらには近代の繪画がある。ファン・ホッホのコレクションはすばらしいものである。複製で知つてゐる画のほんものを満喫した。大きな二室がホッホで、そのほかの所にも少しある。二枚の自画像、はね橋、ひまわり、ルーラン夫人その他沢山ある。アルルの自分の寢室の繪を見てゐるとき、ふつとマチスの名が頭を通り過ぎた。これは構図から来る連想かも知れない。寢台の淡褐色や椅子の黄色などもその連想を助けてゐるのかも知れない。日本の版画の模写もあつた。周りにたどたどしい日本字が写してある。

そのほかフランスの近代の画もあつた。セザンヌ、マネー、モネー、ロートレック、ゴッガンなど、マチスも一枚あつた。ハイチの室というのがあつたからゴッガンでもあるのかと思つたら、近頃のもので一向面白くなかつた。アメリカの特別展というのがあつたので序に見る。一般の入場料は十セントだが、この特別展は五十セントである。クニヨシという人の一枚あつた。面白くもなし。近頃アサヒグラフに出てゐたと思ふ何とか女史のガラスへ貼りつけた模様があつた。これはいくらか美しい感じがなくもない。階下にアジアの室があり、石像やシナ繪や日本のもあつた。歌麿も一枚ある。六曲一双の屏風もある。光茂という落款の掛物や、工藝品に香箱な

ど。レニヨ一のコレクションというのはたいして面白くもなかった。口よごしをしたやうだから、もう一度上へあがってホッホをざつと一周り見て外へ出る。

クローク係へ五セントやつてヒストリッシ・ムゼウムの道をきく。中央停車場まで行つて11の電車へ乗るのがよいと教へてくれた。驛前へ行き電車へ乗るのはやめてそこらをぶらぶら歩く。いい画を見たばかりでまたすぐ歴史博物館を見る気にならないからである。キオスクで切手を買つたらお釣がだいぶ少い。きいてやらうかと思つたがやめた。切手を買つてもチップをとるのかも知れぬ。このあひだの爺さんの茶店でコーヒを呑む。その近くから回遊船が出る。モーターボートで一時間十五分かかり一グルデン十セントと書いてある。繪を見たあとだから今度は景色を見てやらうと思ふ。まだ人が二三人しか乗つてゐないから中々出ないのだらう。もう少し散歩して丁度出ようとするのへ乗らう。ダームの廣場まで行つて「ソワール」を買ふ。この新聞は中々ない。かへりに本屋へ入つてパリの地図などを買ふ。驛前通りに大きな百貨店があるので入つてみる。

回遊船　　ロンドファールトと書いてある一　の所へ戻つたら丁度出るところだつたから乗る。前の方のあいている座席へかける。拡声器を使い英語とフランス語で説明してゐるが、どうもよく分らぬ。こないだ會場を探すとき通つたアムステルダム大学の前の川を通つた。入口は商館の並びにあつて、ちよつと大学の入口とは思へない。千六百何年かの創立である。もう一つの大学の前も通つた。これも古い。十六世紀の建物も残つてゐるさうだ。昨日國立美術館で見た誰かの繪に描いてあるやうな古い町がちゃんと残つてゐるのである。窓ガラスは大きくてきれいに磨いてある。中には美しいレースのカーテンがかかつてゐる。窓枠は暗緑色に塗つてあるのが多い。白いのもある。それらが煉瓦の落ちついた色とよい調和を保つてゐる。カナールをあちこち廻つてアムステルという川を通り、やがて港へ出た。港にはノルウェーやその他の大きな船が泊つてゐた。この入海をオランダ語で「イ」(I)という。「英語ではワイでせう」と案内のおばさんが言つと、お客さんたちが「ヤー」とか何とか言つ。お客にはずるぶん種々の國の人がゐるらしい。

やがて一周を終った。説明が終りに近づいたとき、お客が一齋にごそごそ財布を出し始めたから、御奇特の方はとかなんとか言つたのかも知れぬ。十セントやる。説明はおばさんがオランダ語と英語で、若い男がフランス語だつた。

夕食を外でとらうかと思つたがやめて宿へかへる。「ソワール」を見ると北鮮軍は大邸に二十キロへ迫つたとある。オランダの案内書を見てみたらアメリカへの航空便ははがきで四十二セントとある。ホテルの帳場で教へたのはこれだつた。日本のは書いてないが、それと同じだらう。二十セントはヨーロッパ内らしい。普通のはがきはオランダ、ベルギー、リュクサンブールが六セント、その他十二セントとある。

アムステルダムはどう発音するのかと思つてゐたら、今日ロンドファールトのおばさんはアムステルダムといふ風に前へ少しアクセントをつけてゐた。案内書によるとこの町の名はアムステルといふ川にダム(堤防の意)がくつついたのださうだ。千年も前漁師が住みつけたのが始まりだといふ。土地が低いからアムステル川の入海へ注ぐ沼澤地へ堤防を築いたのだらう。ダムという廣場はその名残であらう。この辺が中心でその周りに輪を書いて町が発達したものらしい。半圓形のカナルが幾條もあり、大体放射状に道がついてゐる。少し遠くなるとそれほど規則性はないが、中心部分はさうなつてゐる。

八月十七日 木曜

今日は快晴である。昨日は朝降り出し昼頃出かけるときは少し降つてゐたが、市立美術館で繪を見てゐるうちに晴れた。この町を歩いて来て感心したのは靴が少しも汚れないことだ。というものがないのだ。しかし町に犬の糞の多いのは閉口だ。氣をつけて歩かないと踏みつける。それからこの町では犬を連れて電車へ乗る。ホテルの食堂へ犬をつれて来る人もある。

物置りが大きな聲で呼びながら町を通る。朝も晩も来る。むろん何だか分らぬ。別に見届けもしないのだが。二三日前町で燻製のやつめうなぎのやうな魚を車にのせて賣つて歩いてゐるのを見た。そ

の類かも知れぬ。

十時ごろ出かける。宿の近くの本屋で昨日見た小さな蘭佛辞典を買ふ。驛まで電車に乗り、驛前通りの本屋で「ソワール」を買ふ。ダームのアムステルダムシエ・バンクで旅行手形をオランダの金に換へてもらふ。空港の両替所と同じに五十セントの手数料をとる。ニグルデン半という大きな銀貨も混つてゐた。半ドルの銀貨よりずっと大きい。カルヴァストラートの本屋を見る。探してゐる本はなかつた。エーヴ・キュリーの「マダム・キュリー」が方々の本屋にある。むろんオランダ譯だ。アルベルト・シュワイツァーの「わが思想と生活」のオランダ版も到る所の本屋にある。これは翻訳が出たばかりなのかも知れぬ。「コペルニクスとその世界」というドイツ語の本があつた。見るとアムステルダム出版なので買つておくことにした。ドイツの本は日本で取り寄せられるが、オランダの本はまだ買ひにくいと思ふ。見てみると買つてもいい本はいくらでもあるが、うかうか買ふことは禁物である。

駅の方へ戻つて昨日きいておいた歴史博物館へ行かうと思ひ、11という電車に乗る。車掌に「ヒストリーシ・ムゼウム・ピッテ！」と言つたら頷いた。地圖を見てこのあたりと思ふところを過ぎなければども教へてくれぬ。ままよと思ひかまはず乗つてゐると暫くして此処だと言ふので降りてみたら、何とインディシ・ムゼウムだつた。もとコロニアル・インスチテュートと言ひ、数年前から印度博物館となつたものだ。此処もプログラムのうちに入つてゐたのだから丁度よい。入つて見る。中々面白い。ジャヴァやスマトラに関するありとあらゆる資料が集めてある。三階まで沢山の室がある。見物途中で喫茶室へ入る。お茶と菓子注文したらカステラを持つて来た。ゆつくり休んで新聞を読む。北鮮軍が大邱の近くまで来たさうだ。

ここを見物しながらこの國の豊かさとそのもとを思つた。町の煙草屋にいつぱい飾つてある種々の煙草も、贅沢な菓子にくつついてゐるチョコレートもみな南方資源によるものであらう。そのもとを荒したのだから恨まれても止むを得ないかも知れないと思つた。

三時少し前に出る。出口でヒストリーシ・ムゼウムをきいたら

ニュー・マルクトだといふ。昨日きいた見当である。さつきの電車
で戻り、ニュー・マルクトで下りたら直ぐ分つた。城のやうな古い
建物だ。十セントの入場券を買つて入る。今日は銀行へ行つたので
鞆を持つてゐる。鞆は其処へ置いて行けといふ。国立美術館では合
札をくれたが、ここではそんなものはない。まさかと思つたが旅行
に絶対必要のもの 旅券と財布 はポケットに移し、鞆を外套
置場へ置いて入る。盗まれるといふことがないとすると羨しいこと
だ。日本より遙かに文明國だ。もつとも日本でも戦争前は下関の驛
で改札口の前へ鞆をおいたまま悠々飯を食ひに行つて来てもちやん
とあつたものだ。現在は非文明國人の悲しさに鞆が気になつてゆつ
くり見てゐられなかつた。もつとも期待したほど面白くもなかつた
のだ。しかし落ちて着いて見れば面白くないこともない。リンネの大
きな本や昔の顕微鏡などもあつた。概して生物関係のものが多かつ
た。十分くらゐでざつと見て出る。鞆は置いたところにちやんとし
てゐた。

驛前まで歩き例の爺さんのところでコーヒーを呑む。俺はどうも
コンサーヴァティヴだと思ふ。一度入つたうちへ入りたがる。こ
こはこれで三度目だ。もう腰をかけるとコーヒーかと言ふから「ヤ
ー」と答へる。今日気がついたのだがこの町の婦人はルージユをつ
けてゐない。たまにつけてゐるのは異邦人が商費人だ。通りからち
らと見えた或るバーの女は真赤につけてゐた。昨日のロンドファ
ルトの案内のおばさんはつけてゐた。

この小公園にも真紅のゼラニウムが咲いてゐる。エルムの大き
な木がある。エルムは町の中に多い。グラクトー カナルとその両
側の通りを含めたオランダ語に 大きなエルムが影を投げてゐる
のはこの町の特徴的な風景だ。カナルの水は余り変化しないと見え
る。潮の干満の差は極く少いらしい。

子供の胸に革の紐を廻して犬をつれて歩くやうにするのは寺田先
生の随筆のどこかにあるが今日二三度それを見た。これは日本人か
ら見ると惨酷のやうだが、実はそれほど惨酷なことでもないといふ
のが先生の意見だつたと思ふ。一度は両側に紐つきを二人引張り、
もう一人は少し大きくてもうその要らない子供をつれたお神さん

だつた。左右の二人は背丈もほんの少ししかちがはないで、同じ服装をしてゐた。白い上衣にレギンスといふのか真赤なのをつけてゐた。何か落して拾はうとすると胸の革紐が緊張して少し窮屈さうに見えた。しかし轉ばない用心にはなる。こんなに連れて歩くのではかうでもしなければ目が届かないかも知れない。それから問もなく別のところで若いおやぢが矢張り紐つきの子供を連れて歩いてゐた。相ついで目撃したのは注意がそれに喚起されてゐたからであらう。

この國の婦人にはずゑぶん太つたビール樽のやうな人が沢山ゐる。みな立派な服を着てゐるが、やはり貧乏人もゐると見える。煙草の吹殻を拾つてポケットへ入れてゐる爺さんもゐる。それでもちやんとネクタイまでつけた洋服を着てゐる。日本の貧乏な大学教授よりもいいなりをしてゐるやうだ。この茶店で往來を眺めてゐると飽きない。さすがヨーロッパの観光地だけあつていろいろの人種が通る。ペレーを冠つてゐるのはたいがいフランス人であらう。東洋人は何人か見たが、日本人らしいのは一人も見ない。一週間ばかり日本語をしゃべらない。

電車のなかなどで人の話してゐるのを聞いてゐると「ヤー」という合の手が入る。それを婦人でもひどく強くまるで長唄かなにかの掛け聲のやうに「ヤッ！」と言ふ人が多い。これはひどく固い感じがする。一昨日であつたか美術館の繪はがき賣場で館員にこれから訪ねる見物先かなにかきいてゐたフランス婦人の「ウィ」というやさしい聲が耳に残つてゐるやうだ。

通りを実に多くの自轉車が走つてゐる。自轉車の流れがまるで目高かなにかが群をなして泳いでゐるやうだ。ゴーストツプの近所でないところを横断するのが事だ。若い人は言うまでもなく、ずゑぶんお婆さんでも乗つてゐる。若い男女が手を組んで、或は肩を組んで流してゐるのも多く見かける。背の高い自轉車もある。

顔馴染みになつたこの茶店の爺さんはむろんオランダ人の顔だが素朴な感じがする。二十セントのコーヒーで二十五セントの銀貨を一つおくとダンケといふ。

「ソワール」を見るとイギリスの飛行機が鎮南浦を攻撃して一千トンの爆弾を投下したとある。さつき行つたニューマルクトの近所には古物市場などがあり、歴史博物館があるのにふさはしい。ここから中央停車場へ行くグラートは汚ならしい裏町で古靴などを賣つてゐる店もある。

八月十八日 金曜

今日は曇つてゐる。今日でうちを出てからまる一週間になる。まだ一度も風呂に入らないが不思議にシャツが汚れてゐない。これは空気が乾いてゐて汗をかかないためであらう。気温も低い。むろん毎晩躰をよく拭いてはゐるのである。西洋人が余り風呂へ入らないのは風土的にさう出来るのである。日本人はきれい好きだから毎日風呂へ入るなどと言ふのは正確でない。あんなに湿気が多くてだから汗を流し躰がべとべととしては入浴せずには済まされなわけだ。

十時ごろ出かける。今日は薄い毛糸のチョッキを着てレインコート持参だ。フランス領事館をさがす。昨日買ったドイツ語のアムステルダム案内は年号はなくて少々古いと思つたが、それに出てゐるヘーレングラート七五四をさがしたら見当らない。そのあたりは銀行やオフィスが多い。通りかかつた娘さんにきいたら暫く考えてゐたが「ア、ウィ」と言つてとある入口へ連れて行つてきいてくれた。その男がヘーレングラート四五〇だと教へてくれた。其処へ行つてみたらない。その近くにイギリス領事館がある。その隣のやはり銀行のやうな受付の娘さんにきいたら電話帳を繰つて二八と教へてくれた。やつと見つかつた。十一時少し過ぎになつた。二三人待つてゐたらフランス婦人の館員の手があいたから、横濱でヴィザの申請をして書類をこちらへ廻してくれる筈ですが、ときいた。まだ来てゐないと言つ。また来ますと言つたら、電話で知らせて上げます、何番ですかと言つ。この町で電話の用はあるまいと思つて覚えて来なかつた。アドレスを書けといふから町名とホテルの名を書いてさよならをした。親切なマドマゼルだ。或はマダムかも知れぬ。

町をぶらぶら歩く。驛の方へ向ふつもりでたらめに見物しながら歩いてゐたら、驛とは反対のスタデイウムのある終点へ出た。途

中にホイヘンスストラートなどというのがあった。このホイヘンスは科学者ではなく政治家のホイヘンスだらう。終貼から24といふ中央停車場の電車が出る。それに乗る。始発だからがらである。ゆつくり腰をかけて驛まで行く。驛前からマルケンへ行くボートの出る所を見つけた。そこへ入つて時間表を見ておく。十時と午後一時に出る。マルケンは日曜にでも行くことにして今日はレンブラントハウスを見ようと思ふ。11という電車に乗りニューマルクトの次で下りる。地図を見るとその見当だからである。そのあたりには古物市場があり余り感じがよくない。大連あたりの小盗市場を思はせる。果して浮浪児とまでは行かなくてもその種類の十六七の若者がやつて来て頻りに「アハツエーン、アハツエーン」と言つて手を出す。何のために十八セント要るのかきいてみようかと思つたが、無用の問答はやめた方がよいと思ひ「何だ分らぬ」とフランス語で答へた。向うでも分からなかつたらうが、とにかく諦めて手を引込めた。こんな所に長居は無用とさつさと賑かな通りへ出たが、ヨーデングリーストラートにぶつからない。向うからやつて来る郵便配達の爺さんに「レンブラントホイイス」と言つてきいたら「ヤー、ヤー」と言つてあとはさつぱり分らないが僕を引張つて通りの反対側へ連れて行き、向うを指してあそこだと言つてゐるらしい。そこから僅か二三軒さきだつた。その三四軒手前から右へ折れた方ばかり見てゐたのだつた。

「レンブラントホイイス」という看板は出てゐるが扉がしまつてゐるので呼鈴を押すと、よちよち歩くやうな小さい子供があけてくれた。中にその父親らしい若い男がゐた。五十セント払つて中を見る。ここはエツチングが集めてある。自画像、サスキアと自分の像、母の像、風車のある風景その他沢山ある。三階がシテユディオだといふ。繪はがきを一組買ふ。記名しろといふから名前を書きTokio, Japanと書き加へたら、この國の人に珍しいからあなたの國の字も書いてくれといふ。日本字の署名も附け加へる。

ここからカルヴァストラートの方へ出る道は見当がつくから歩いて行く。途中に古本屋があつたので入る。ドイツの本はないかと言つたら三階へ連れて行く。あぶなかしい梯子段である。アレニウスのドイツ訳はなかつた。もし東京なら買つてもよい本がいくらかあ

つたがやめた。十分ばかりで出る。

ダームのキオスクで「ソワール」を買ったら八月十七日つまり昨日のだ。早速返して金を受取る。ダムラックの本屋で今日のを買ふ。驛前通りを歩いてみたら小雨が降つて来た。百貨店の前のカフェへ入つてコーヒを呑み新聞を読む。北鮮軍が大邱へ迫つてゐる。國連軍も真剣に戦つてゐる。

百貨店へ入つて見物をする。アイスクリーム賣場で大勢買つて食つてゐる。二三日前見たときはただのクリームかと思つた。瓦せんべい地の円錐へつめた白いクリームだからアイスクリームと思はないのは迂闊な話だつた。今日はEJSという字に気がつきアイスと分つた。子供も姿さんも立つて食つてゐる。このアイスに限らず歩きながらものを食ふのは平気らしい。子供の洋服へクリームをくつつけて骨折つて拭いてゐる細君もゐる。土産物に風車へ銀の木靴をつけたのがちよつと可愛いが、ニグルデン三十五セントくらゐするらしい。しかしほんものの銀だ。銀製品はいろいろある。

そこを出て試みにダムラックの裏通りを歩いてみる。映画館があつてピストルを打つ放す毒々しい繪看板がかけてある。古道具屋があつたり、うまさうな菓子を沢山並べた店、靴屋、雜貨店等が並んでゐる。

それからライドシエストラートを通りライドシエプレートの売場まで来ると驟雨が降り出したので、大きなプラタヌの下で雨宿りをする。煙草に火をつけようとしたがライターが重くて二度ではつかなかつた。すると火のついた煙草を差し出す男があつたのでサンキューと言ひながら見ると印度の人だつた。東洋人のアミティエかも知れぬ。傍に花賣りの爺さんがゐてその相棒だか顔見知りだかとパキスタンと言つてゐる。何か噂をしてゐるらしい。

小降りになつたので電車に乗つて帰る。宿の近所に本屋があるので其処へ入る。アムステルダム近傍の地圖はないかと言つたら、昨日もどこかで見かけた北オランダのを出した。それにはライデンが入つてゐないので、ライデンを含むのを欲しいといふと北オランダ

ダと南オランダと一緒に買ったのを出してくれた。

宿へ帰つてから雷が鳴り出し雨がまた来た。しかしさう沢山は降らない。食堂にゐるときも鳴つてゐた。夕食にパンは出ないが言へばくれるらしい。ドイツ人らしい二人連れは客はしきりに「ダス・ワッサー」とか「プロート」とか言つて注文してゐた。自分は定食の料理だけで十分だ。ひるは飯らしいのを食つたことがないから知らない。朝食のカロリーが多いから西洋人なみの昼飯など食つたらもたれてかなはない。コーヒーを呑んで菓子の少しも食つておくと丁度よい。さうすると夕飯がうまく食へる。また外のレストランへ行つてみないからどんな物を食はせるのか知らない。ホテルの定食ばかり食つてゐるのは野暮ださうだからたまには外で食事をしようかと思つたこともあるが、やめにした。コングレスに俺を断はつたこの國の人の目が何処かで咎めてゐはしないかといふ気がする。ジャヴァあたりの戦争で子供を失つた母親の目がこの日本人に注がれてゐるかも知れない。しかし現実にはそんなきびしい目に遭つたことはない。ただそんな気がしただけである。

また夕食後は外出をしない。昼間出あるくので疲れるのと、いくらかは遠慮もあるからだ。静かな宿にゐて繪はがきでも見たり、明日のプランを立てたり、金の勘定をしたり、買つて来た本をみたり、ゆつくり日記を書いたりすると十一時くらゐになつてしまふ。オランダの金もすつかり分つた。

オランダ日記(四)

『ももんが』一九九〇年二月号

一九五〇

八月十九日 土曜

今日はよい天気なり。これからライデンへ行かうと思ふ。そのライデンだが驛へ行つてライデンとかレイデンとか種々に言つてみたが通じない。仕方がないから手帖へ書いて見せた。丁度それと同時にうしろにあた青年がオランダの発音でライデンだかレイデンだか言つてくれたライデンとレイデンの間の音である。一つにはしの発音が悪かつたので分らなかつたのかも知れない。電車がとまつてゐたから西向きはたいいていライデンを通ると思ひ、車掌に「イス・ト・エス・ナハ・ライデン？」ときいたら「ヤー」と答へた。乗つてしまつてから外を通る若い驛員にライデンまで何分かと今度は英語できいてみたら分らなかつた。一直線にすれば三十キロくらゐだからせいぜい四五十分だらう。五分も待たぬうちに発車した。扉をあけて入つたところに撥ね上る座席がある。それへ掛ける。間もなく牧場が見えて来た。牛が澤山ある。大きな牛乳瓶をいっぱい積んだトラックが町を走つてゐる。チーズが毎朝宿の食事につくわけだ。畑も見える。燕麦のやうなのや背の低い小豆のやうなのやキャベツなどがある。グラチオラスなどの球根類を作つてゐるところもある。遠くまた近くに風車が見える。

最初にとまつたのハーレムであつた。多勢乗り込む。子供連れの婦人に席を譲る。この調子では次にとまるのはライデンだらうと思つたので、下りてみたら果してさうであつた。小さな静かな町である。駅前にシリンスターを冠つた馬車屋がある。「ウエテンシャペリック・ゲシーデニス・ムゼウム」と言つてきたら暫く考へてゐたが、アカデミーかと言ふ。多分さうだらうと言つてそれに乗る。十分ばかりで大学へついた。ついでに大学も見せてもらつてもよいと思つたが、休暇中なので掃除婦らしいのが漸く事務の人をさがしてくれた。見学は断念して科学史博物館をきく。二三丁驛の方へ戻

ったステーンストラート一番地 a だと教へてくれる。ライデン大学もやはりカナル沿ひの通りに面してぢかに建物があるので、ちよつと見たのでは大学とは思へない。

国立科学史博物館はすぐに分つた。そこへ入らうとしたとき向うの方をローレンツ教授を思はせる風采の老紳士が歩いてゐた。さすがにライデンである。ライデンの連想があゝの老紳士をローレンツらしく見させたのかも知れない。入つてすぐの廊下に古い顕微鏡などが並べてあり、壁にはヴォルタのオートグラフ等の写真版が沢山かけてある。左の方を見るとホイヘンス・コレクションの室がある。ホイヘンスの時計がいくつも飾つてあり、大部分動いてゐるのにすつかり感動した。プラネタリウムやレンズもある。本でよく見てゐるホイヘンスのレリーフがある。実物は大理石である。

物理の室にはローレンツその他大勢の学者のオートグラフがある。それを一々見てゐたら館員のお爺さんがやつて来て、オンネスだのヘリウムだのと言つて説明してくれる。俺はフィジケルだと言つたら「コム！」と言つて器械を藏つておく室へ連れて行つた。さうしてゼーマンの磁石の模型などを見せてくれた。物理の陳列室へ戻りカスバートソンの有名な起電機やムツシエンブルックの空気ポンプその他を見る。すばらしいものだ。オンネスが初めてヘリウムを液化した装置もここへおいてある。

二階に生物関係の室があるのでそこをざつと見て更に階下をよく見る。物理の隣りに天文の部屋があり、ニュートン式の反射望遠鏡その他がある。その奥に顕微鏡の室があつて、レーウエンフックだのムツシエンブルックだの顕微鏡がある。例の爺さんが時々説明してくれる。オランダ語であるが物がものだけにいくらか分る。例へばレーウエンフックは「エールステ、マーケルだ」といつた具合である。こつちはドイツ語で受け答へをし、たまには質問をする。爺さんドイツ語は分るらしい。

オランダ語の目録と繪はがき一組を買ひ、ほかに印刷物はないかときいたら図書室へ連れて行つて、出版物の目録をくれた。それを見てめぼしい印刷物を買ふ。その目録に肖像やオートグラフの写真

が出てゐるので、これはないかと言つたら、セクレタリかなにかの老婦人をつれて来た。この婦人は英語を話す。写真はないがネガチフがあるから四五日待てば焼付けてやるといふ。四五日はゐないかも知れないと言つたら、送つてやるといふので少し頼んだ。ローマ字の名刺を出したら日本の字も書いておけと言ふ。書いたらそれを見てさらさらと僕の名を書いて見せた。もつとも子供が書くやうに何処からでも勝手なところから書くのである。習つたのかときいたら少し習つたといふ。面白い婆さんだ。

それからまた図書室を見せてもらった。ずらりと並んだホイヘンス全集を見る。最近二十二巻が出て完成したところである。第一巻は一八八八年に始まる大事業である。本を見出したらきりがないので辞去する。三時間を費したのである。別れ際にお爺さんの名前を手帳へ書いてもらった。陳列の係らしい。

町へ出てランチルームと英語で書いてある安食堂を見つける。一〇〇セント、一五〇セント等と書いてある皿盛りのランチには大きなパンが載つて居り、余りマツシヴで食ふ気にならぬ。コーヒーを呑んで菓子を食ふ。カステラの上にチョコ・コレートの乗つかつたのでうまい。カタログや絵はがきを見てゐると驟雨が来たのでゆっくり休む。こんな安つばい食堂でもバンドがあつて何か奏し初めた。やがて小降りになつたので外へ出る。

ライデンの町もカナルが多くて町中でも反ね橋がある。アムステルダムでは場末へ行かないとない。さつき馬車でがたがた通りながら古本屋を見たので其処へ行く。もう一軒の本屋も見えて少し買物をする。驛の方へ歩いて行くと大きな風車があつたので傍へ行つてみる。立札がしてあつて「焼物を見にお入り下さい」と英語で書いてある。行つてムーランの呼鈴を押すと「向うへ廻つたクライネ・ホイスヒェンだ」といふ。なるほど風車小屋の裾に小さい家が寄生してゐる。めんどろくさくなつたから其処へ入るのはやめた。ポツテリに特別の興味はないが時間があつたのと風車に引かれて来たのだ。もう一度町を歩いて繪はがきなど少し買ふ。プールハーフェは此の町の人と見えて銅像があるらしい。繪はがきやでこれは何処かときいたら驛の向側だといふ。少々くたびれたから繪はがきで満足する

ことにした。ブルハーフェの文献は少し科学史博物館で買って来た。

四時少し過ぎ驛へ戻る。十分ばかり待つと上りが来た。省線電車のものだが、もつとがっちりしてゐる。今度はライデンとハーレムの間で一度停車した。ゆつくり腰をかけて景色を見る。きれいな家がある。村には高い尖塔がある。教会である。オランダ語ではケルケといふ。これが生活の中心である。日本では鎮守様とお寺の本立だが、こちらは教会一本ですむらしい。この方が簡単だ。ハーレムの次はアムステルダムまで止らなかつた。着いて座席を立つたら余り服装のよくないお神さんが出口はこちらだと教へてゐる。自分は知つてゐたのだが、有難うを言ふ。こちらも余り服装がよくないので、これはプロレタリアのアミティエかも知れぬ。

ライデンまで行つてホテルへ帰つて来ると何だか家へ帰つたやうな気がするから妙だ。今日のライデン行は成功であつた。博物館で貰つたり買つたりして来た印刷物を見る。新聞を見ると大邱には一般人の退去命令が出てこつた返してゐるさうだ。

さつきホテルのエレベーターを上るとき東洋人が一緒になつた。向うから「あなたはシナ人か」ときいた。「ノン、ジャポネー。」
「私はシナ人です。」自分は三階で下りるので「ボンソワール、ムツシュ。」英語できいてきたから英語で答へればよかつたが、さういつてしまった。それはやつぱり腹の虫がさうさせたのであらう。

町を歩いてゐると爺さん婆さん、中年もの、若いものとも互に腕をからんで歩いてゐるのをよく見る。それほど信頼できる相手が見つかつたのならたいした果報者だ。種族保存につながる本能の一樣相に過ぎぬとすれば吾亦何をか言はんや。日本人のやうに俺は俺、お前はお前で勝手に歩いてゐる夫婦の方がお互を尊重してゐるとも言へないことはあるまい。

八月二十日 日曜

今日はよい天気だ。九時少し前宿を出て驛前のマルケン行のポルト発着所へ行く。乗り込んだら九時半でまだ空いてゐた。十時発。

このコースは海へすぐ出ないで陸地のカナルを行くのである。午後一時のは海を行くさうだ。一度パナマ地峡式に開門で水位の低いところへ移った。陸地内のカナルの水位は海面より低いのである。ブックといふ所で三十分休み、チーズ(オランダ語カース)を作る所を見せた。オランダ語、英語、フランス語で説明する。次にモニケンダムといふ所でまた三十分上陸。一時半マルケンの島へついた。船がつくとマルケンの服装をした子供たちが棧橋へ多勢寄つて来る。お客は珍しがつて引張り廻したり写真をとったりする。向うは慣れたものでポーズをする。小さいうちは男の子も女の子も同じ服装ださうだ。今日は日曜だから聖書を持つて教会から帰つて来るお婆さんもある。裾の広い黒いスカートで其の上に縦縞の白つばい広い前掛をかけてゐる。着い娘さんやお神さんは首輪をつけてゐる。赤い玉を輪につないだのを三段にして合せるところは金の金具になつてゐる。そこへ四角なボタンがついてゐる。男は広いツボンを膝の下でくつたので、上衣はタイトである。襟の合せ目に金の玉がついてゐる。子供は白地で大人と同じやうに広いダンブクロを穿いてゐる。チョッキはたいてい赤で、上衣は鼠色がかつたのが多い。上衣の下端から赤いチョッキが見える。

島の民家の中も見せてくれる。遊覧船の会社と契約してあるモデルハウスであらう。島には一六一年などと彫りつけた家もある。次に三十分船に乗り対岸のフォレンジムに着く。ここでは白いレースの帽子を冠つてゐる。両側が馬の目かくしのやうに出つ張つてゐる。マルケンののはぴつたりしたのである。フォレンジムでも民家のモデルを見せる。せむしの婆さんが入口に皿を持つてゐたので十セントおく。かへりはフォレンジムから電車で驛前へ出たが、中央停車場とは別である。電車も小さなものだった。

今日は日曜で本屋もキオスクも休みで新聞を買ひそこなつた。朝鮮の戦争も大方休みだらう。今日は遊覧船で晝飯を食つた。これもパンは出なかつた。ポン・フリットを沢山つけて来たが、さうは食へないから大方残した。隣りに坐つてゐるお嬢さんなどは残さず食つてしまつた。今朝遊覧船で日本人かと思える婦人を見た。昨夜うちのホテルのエレベーターで曾つたシナ人の細君ということは今夜食堂で分つた。

八月二十一日 月曜

今日もよい天気。この町へ来てから昨夜でまる一週間たった。招かれぬコンGRESも今日で終りの筈だ。今日は遠足らしい。自分はレンブランド、ホッホ、ライデンの科学史博物館などを心ゆくばかりゆつくり見学した。あとハーレムのテイラー・インスチチュートへ行ってみれば十分だ。今日行ってみよう。博物館は月曜が休みだけれども、インスチチュートだから休みではあるまいと思つてハーレムへ行く。驛前でお巡りさんにきいたら、テイラー・ムゼウムかという。さうも言うかも知れぬ。行つてみたら矢張り休みだった。これは失敗であつた。驛前の巡査がドワーに突き当たら左へ少し行くのだといつた。ドワーはタワーと分るのに時間がかかつた。なるほど教会の大きな塔に突き当るのである。そこでもう一遍きいてすぐ分つた。

その教会の横に廣場があつて誰かの銅像がある。見たらローレンス・コスターという人だ。オランダではこの人が印刷術の発明者だと言つてゐる。廣場の前のレストランで休む。そのレストランにきれいなフランス語を話す女給さんがゐた。さつき買った地圖を見てゐると驛の向側にハルスプレーンというのがある。そこへ行つてみる。その少し手前にきれいな公園があつた。さつき買った繪はがきにハルスの銅像があるので、ハルスプレーンを見廻したが見当らぬ。向うにフランス・ハルスと大きく書いた建物があるから行つてみたら、何と映画館であつた。ハルス・ムゼウムも今日は駄目だから、そこらをゆつくり歩いて、それからアムステルダムへ帰る。電車は十五分くらゐしかかからぬ。

まだ二時少し過ぎである。百貨店を見物する。昨日電車から立派な古本屋が目についたのを思ひ出して其処へ行く。行つてみるとそこは陳列だけで店は別のところにあると書いてある。その近くだ。そこへ行く。実に立派な本が沢山ある。先ずアレニウスをきいた。スウェデン語でもいいと言つたがなかつた。ついでに本の見物をする。もつとも手にはとらないで背中を見るだけである。ニュートンの「プリンキピア」、ニュートンの全集その他すばらしいものがある。高根の花は見ただけで満足した。

それからカルヴァストラートを歩く。電車通りに平行の通りで豪華な商店街である。しばらく散歩して五時過にホテル・ポーレンにセルジユスク教授を訪ねたら不在だったから置手紙をして来る。小雨が降って来たので宿へかへる。

毎晩八時から九時ごろへかけて呼賣りが通る。朝も聞えるが、夜はよく響く。実に通る聲でヨンフェイだかコンフェイだか、そんな風に聞こえる。感じは余り好くない。

オランダ日記(五)

『ももんが』一九九〇年三月号

一九五〇

八月二十二日 火曜

昨日セルジェスク教授に会へなかつたので置手紙をして明朝伺ふと書いて来た。八時半頃宿を出る。電車がなかなか来ないのでカルヴァストラートのホテル・ポールンへ着いたら九時二十分頃になつてしまつた。教授はホテルにゐた。アメリカのサートン博士がコンGRESへ来てゐたら會ひたいと思つたのできいてみた。プログラムには出てゐたが、たうとう来なかつたさうである。われわれの学会へ雑誌をもらつてゐるのでそのお礼も述べたいと思つたのである。歩きながら話す。ダムラックのレストランで茶を呑む。教授は紅茶に牛乳を入れないといふ。自分が入れた。日本では入れるかとときく日本ではかういふ紅茶でなく、緑茶で砂糖なし、もちろん牛乳なしだと答へる。それはうまいだらうといふ。日本の茶を少し持つて来ればよかつた。日本では生活が中々楽でないだらうと言ふから、然りと答へた。自分はルーマニアにゐて戦争中逃げ出したので本なんかみんななくしてしまつたと言ふから、私も戦争中朝鮮の京城にゐて敗戦後引揚げたので同じ目に遭つたと言ふ。パリへはいつ来るかと言ふので査証が貰へ次第行くと答へる。教授はコンGRESで疲れたから今日はハーグへ遊びに行くと言ふ。パリで會ひませうと固い握手をして別れた。

日本を立つ少し前に丸善のアナウンスメントに教授の本が出てゐた。「微分学の確立に到るまでの数学的無限に関する研究」といふのである。出かける前に取り寄せて読むことは到底できなかつたが、これだけでも教授について知ることができたのはよかつた。パリへ行つたらこの本は見られるだらう。

教授に分れるとすぐその足でフランス領事館へ行く。このあひだの婦人館員は席に見えない。仕方がないからもう一人のこの國の事

務員に査証のことをきく。横濱で申請を出したが出発間際だったの
で、横濱領事部からこちらへ書類を廻してくれるといふことでした
が、もう来てゐるでせうかと訊ねた。引出しのカードをめくつてま
だ来てゐない、それは二箇月かかるといふ。そんなべらぼうなこと
があるものか。横濱領事部では航空便で送るから八日もあれば届く
と言ひました、それに電報を打つておいてくれると言つてゐました
が電報は来てゐないでせうかときく。いや、航空便の問題ではない、
書類の手續に暇がかかるのだと言ふ。さうして肩をすばめて駄目だ
といふ表情をする。丁度そのときこのあひだの婦人館員が奥の室か
ら出て来て、自分の席へ戻つたので、先日は有難うございましたと
言ひ、まだ書類が来てゐないさうですが國際科学史連合の事務所が
パリにあるので行きたいことを話した。このあひだは書類がまだ来
てゐないといふからあつさり帰つたが、今日はこの町に開かれた總
会に出席したこと、また自分は日本の代表として来たこと、それか
ら國際連合の幹事の先生がパリから来てゐるので、できればその先
生と一緒にパリへ行きたいことを手短かに話した。すると即
座にそれではパリの外務省へ電報で照會しませうといふ。それでは
明日でも参りませうかと言ふと、電話で知らしてあげます、今日は
電話番号を覚えて来ましたかといふ。今日は書いて来てゐるので答
へた。するとこのあひだ書いた住所の紙片を出してこれですなと言
ひ、その紙へ電話番号を書きつけてくれた。それから申請書を書き、
写真をつけませうかといふと、あつたらどうぞと言ふ。何枚ですか
ときくと、一枚で結構ですといふ。何処まで分りがいいのだらう。
電報料を頼んで其処が出る。これでなんとかなると思つてほつとし
た。地獄で仏に會つたやうだとはこんなのを言う言葉であらう。そ
れでは今日はこれからハーレムのテラー・インスチチュートだ。
ハーレムは昨日行つて来たばかりだから、もう勝手が分つてゐる。

中央停車場から電車へ乗る。今日もとばかりの座席に腰をかけて
みると、少し田舎くさい青年が戸口のところでハーレムはこれとい
いのかと聞いた。自信を以て「ヤー」と答へる。大いに面目を施し
たわけだ。

十二時少し前に着いた。少し雨が降つてゐる。昨日行つた教會の
そばのレストランへ入る。昨日は晴れてゐたから外の椅子にかけて

往来を眺めたが、今日は雨が降つてゐるので中へ入る。しかしまだ飯は食ひたくないからコーヒーにする。昨日のフランス語を話す娘さんは見えない。中年のボーイがやつて来た。覚束ないオランダ語を使う。「コフィー・メット・メルク」だ。それから「ゲバク」。ゲバクはバーケンしたもの、つまりパン菓子だらうと思ふ。しかるべきものが来た。

小一時間休んで、それからテラー・ムゼウムへ行く。昨日入つて行つた扉から入つたら其処は研究所の事務所だつた。道理で昨日そのセクレタリのやうな婦人が出て来たのを思ひ出す。その婦人が出て来たので名刺を出して見學を頼む。そしたらムゼウムの入口は角を廻つた河岸の方だという。そこへ入ると中から連絡があつたと見えて鄭重に迎へてくれた。入つてすぐの室は化石だ。立派な標本がある。その次に物理の室で大きなライデン瓶や起電機がある。フアン・マルムの大きな起電機は嘗て「ツァイトシュリフト・フュア・テヒニツシエ・フイジーク」に載つてゐたシマンクの記事に写真が出てゐたので、一目でわかつた。一七八四年にアムステルダムで作られたものだ。嬉しくなつてよく見る。ガラス板の直径一六五センチで当時最大のものである。オランダ文の説明でもかういふものは大体わかる。それらをノートしてゐたら年とつた館員がカタログを持って来て貸してくれた。帰りにコンシエルジュへ置いて行けばよいといふ。自分は絵の方の専門で物理の方は分らないが、あとでいらつしやいといふ。このお爺さんはフランス語だ。かういふ印刷した目録があるなら多分買へるか貰へるかするだらうと思つて筆記はやめた。一六七二年に作られたニュートン環の装置だの、もつと近いものではキルヒホッフ・ブンゼンのスペクトロメーター、カニール・ラ・トゥールのサイレン、ケーニツヒの音響実験装置、その他面白いものが澤山ある。

今度は若い館員がやつて来て、もう五分位したら物理部主任のフォッカー博士が来られますが、あなたはお時間はいいですかとはいふ。もちろん結構だ。やがてドクター・フォッカーがやつて来た。長身の先生だ。いろいろと説明しながら案内してくれる。此の先生の英語もどうも分りにくい。オランダの人の英語は分りにくいやうだ。比較するのはわるいが、マルケン行の遊覧船の英語もハーレムの巡

査のもみんな分りにくかつた。

第三室は天文関係で望遠鏡やプラネタリウムがある。航海に関するもの、オランダの風車の内部を示す模型などもある。商賣柄物理の室が一番面白かつた。音響に興味があるなら新しいオルガンをお見せしようといふから随いて行く。パイプオルガンである。ホイヘンスのアイデアだと言つてゐるらしい。そのホイヘンスの発音がなかなか分らなかつたが、ニュートンの前の科学者で光の波動説を出した人だと注釈してゐたからホイヘンスに間違ひないことが分つた。初めにあつたのは普通のパイプオルガンであるが、新しい方といふのはキーの排列が全く新しいものであつた。出来たばかりだといふラベルを見たら一九五〇と書いてあつた。これは歴史ではないと言ふ。その通りだと答へる。この完成に二十年かかつたさうだ。

次に面白いものをお見せしませうと言つて図書室へ案内した。その係にヤパンとか何とか言つてゐると思つたら、その係員が理化学研究所の欧文報告と彙報を持つて来た。今年の六月のまで来てゐる。欧文のと日本文のと同じ内容かときくから違ふのだと答へる。これを見ても別に郷愁を誘はれるほどではなかつたが、少しばらばらやつてゐたら、お國でゆっくり御覧になれるでせうと言ふ。つまり、お前のところの雑誌が俺のところにもあるぞといふ積りでわざわざ見せてくれたのであらう。この図書室には背皮の立派な装幀の本が沢山あつた。すばらしく型の大きい本がだいぶあつた。

それから絵を好きかと言ふから好きだと答へる。絵の室へ案内してくれた。レンブラントを見せようといふので、レンブラントは阿姆斯特ダムでエンジョイして来たと言へると、あれはペインティング、これはドロウイングだと教へられてしまった。さういえばヘルムホルツも『講演集』の中でゲメルデとツアイヒヌクを区別してゐたのだつた。そのドロウイングが沢山ある。ワットマンの全紙くらゐのに描いたもので、素描かちよつと色をつけたものである。それを見せながら例の絵画主任のお爺さんへ引き渡された。その室は四方の壁に油絵がかけてあつて、それは皆オランダの絵であつた。壁の前のケースには画帳のやうなものや、紙に描いた画が置いてあつた。厚紙の覆ひがあつて見るとき開けるやうになつてゐる。

次の室にミケランジェロのデッサンがあると云つて案内してくれた。壁に貼つてあつてカーテンが引いてある。それを開いて見せた。これは写真版などではなくて本物である。すばらしいものに違ひない。レオナルド・ダ・ヴィンチも一枚あつた。ラファエルもあつた。その奥にもう一室あつて、そこは油絵だった。たいがいオランダのものらしく、名前を知つてゐるやうな作家は見当らなかつた。お礼を言つて其処を出る。

今度はひとりで物理の室をもう一度見る。借りた目録を玄関で返し、その新しいのを一部買った。写真はついてゐないが、稍詳しい説明がついてゐる。外へ出たら四時だ。ぶらぶら驛の方へ歩く。教会の多い町だ。ライデンよりは大きいらしい。アムステルダムほどではないが、やはりカナルがあり、従つて橋がある。町の感じは大体似てゐるが、建物がアムステルダムのより少し低い感じだ。この町にハルスムゼウムというのがあつたが、今日はもう疲れた。機會があつたらまた来ようと思ふ。査証を貰ふのにもう二三日かかると思うと、その二三日を最も有効に使ふことを考へなければならぬ。ライデンにはフォルクスクンデのムゼウムというものもあるさうだから、それを見てもよい。ファン・ホッホをもう一度見るのもよい。それからハルスムゼウム。

そんなことを考へながらアムステルダムへ歸つた。驛前で新聞を買つて宿へかへる。歸つたら、さつきフランス領事館からすぐ来るやうにといふ電話がかかつたといふ。もう五時五分過ぎだから今日は駄目だらう。明日の朝早く行くことにしよう。明日査証が貰へれば明後日はバリへ行ける。有難い。今日テラー研究所を見てよかつた。ムゼウムはその一部分で、全体はテイラー・ステイヒティングといふのだ。さつき買つて来た科学器械の目録を見ると、著者はプロフェッサー・ドクトル・フォッカーともう一人になつてゐて、テイラー・ステイヒティング物理部主任となつてゐる。講義もしてゐると言つてゐた。講義室も見せてくれた。また或る器械についてこれを講義のとき見せるなども話してゐた。

新聞を見ると北鮮軍が馬山の西北に猛攻を加へてゐるといふ。北

鮮軍は一九五〇年型のソヴェートの銃器を用ひて居ることが分捕品から分つたと。これはレーク・サクセスへ送られたさうだ。

オランダ日記(六)

『ももんが』一九九〇年六月号

一九五〇

八月二十三日 水曜

今日は曇。九時にフランス領事館へ行く。昨日すぐ来いといふ電
話だったので、おくれてはわるいと思つて早く行つた。九時ごろ開
くだらうと思つたのである。入口の扉は開いてゐたが、受付の入口
のところへ例のオランダ人がちようど通りかかつて、自分が入つて
行くものだから待ち構へる恰好で突つ立つてゐた。仕方がないから
お早うを言つたら、九時二十分に開くと言ふ。引返してカナル沿
ひを歩き電車通りまで出た。そこに版画などを賣つてゐる家があつ
たのでショーウィンドウを見る。日本の版画も一枚あつた。時間を
見計らつて戻り、九時二十五分に入つて行つた。婦人館員がゐる。
昨日は電話を有難うございました、昨日はハーレムのテイラー研究
所へ行つて夕方帰りました、と挨拶をする。「さう、あなたがお出
になると直ぐ書類が廻つて来ましたのよ。」さういふ調子に受け取
れた。査証をするが、その前にイタリアのトランシット・ヴィザを
取つておいた方がよいと言ふ。ヘーレングラートの六〇九だと教へ
てくれる。イタリア領事館へ行く。ヨーロッパではちやんとイタリ
ア領事館が開いてゐるのである。イタリアは講和條約をもう結んで
ゐるのだらう。パリに暫く滞在してそれからローマで飛行機を乗り
換へて日本へ帰るのだが、さきが長いからローマで一日か二日滞在
したいから査証をして貰ひたいといふ。受付の人は書類を持つて奥
へ行つた。領事に話すのだらう。暫くして戻つて来て、そんな先の
査証はできないからパリへ行つてから貰へといふ。フランス領事館
へ行つてその旨を傳へた。それから例のオランダ人事務員をしてイ
タリア領事館へ電話をかけた。さうして、それでは行先を日本
にしておくからよろしいと言ふ。すぐ査証をしてくれた。昨日あつ
けた電報料は返してくれ、査証料五百フランをオランダ貨幣で五グ
ルデン五十セント拂ふ。印紙を貼つたりするのは例の男の事務員だ。

ざまあみやがれ。領事館の壁にエール・フランスの廣告のバリの写真が目につつた。ローマのトローヤン・コロンに似たスパイラルに浮彫のある柱が立つてゐる。あしたはあそこへ行かれるのだと思ふ。フランス人館員に厚くお礼を言ふと、にっこりとして會釈した。涙がこぼれさうになった。

すぐに航空會社KLMの事務所へ行つた。明日パリへ行く座席があるかときくと、朝と二時と夕方とあるが、どれがいいかといふ。二時のがいいといふと、ちよつと待てと言つて調べてくれた。あるといふ。それを頼んだ。十三時四十分までにライドシエ・ブレーンのKLMへ来ること、飛行機は二時三十五分に立つことを切符の表紙へ書きつけてくれた。俺のホテルでは先だつてタクシーを頼んだら「ノー・タクシー・サー」と言つたが、こちらからタクシーを差し向けてくれるかときく。タクシーのマネージメントへ電話をかければ寄越すといふ。

ダムラックへ行つて一二度入つたことのあるレストランへ入り、茶を呑みながら今日の午後と明日の午前をどう使はうかと考える。ファン・ホツホをもう一度見ようかと思つたが、昨日見残したハーレムのハルツムゼウムを見ることにする。ハーレムはKLMのそばから出る小さな市内電車みたいなので行かれるのを見たが、二度行つて慣れてゐる中央電車場から出る省電式で行くことにする。十五分で行かれるのだ。

一時ハーレム着。驛でバスの車掌にハルス・ムゼウムと言つてきいたら、向側のあのバスだと言つて教へてくれた。それに乗る。ハルス・ムゼウムと言つて頼む。暫く走つてからあそこだと言つて教へてくれた。バスはその横丁を通り過ぎて間もなく止つた。示された横丁へ入つてみたが見当らない。逆戻りしながら此方へ歩いて来る人にハルス・ムゼウムは何処かときいたら、てんで駄目だといふ風に手を振つてウツとか何とか動物的な聲を出した。それは外國語を解しないことに対する恐怖のやうにも取れた。ことによるとこの東洋人に対する感情であつたかも知らぬ。もう少し知能のありさうな人にきけばよかつた。少くともドイツ語でよく方がよかつた。それでもハルス・ムゼウムといふのが解つたのか、うしろの方を指

したやうな気がしたから見渡したが分らぬ。またバス道路のところへ出てしまった。ふと見ると其処の電柱にハルス・ムゼウムで今特別展覧中のポスターが貼つてあるので此の近くであることは間違ひがないのだ。ちよつと立つてみると二人連れの女学生位の娘さんが来るので、きいてみた。するとハルス・ムゼウムを知らなかつたが通りかかつた紳士をつかまへてきいてくれた。その紳士がさつきの横丁を指して「トウーデ・ストラート」と教へてくれた。つまり車掌が教へてくれたバス道に直角の通りを行つて二つ目の横丁だといふのである。それですぐに分つた。

入つてみると中々立派な美術館だ。初めの方の室には十五世紀・十六世紀の繪がある。つまり前菜だ。それからハルスが沢山ある。兵隊や役人の群像が多い。「織物組合幹部」(一六四一)の群像はレンブラントのそれと似た構図である。レンブラントのがハルスに似てゐると言つた方がもちろん正確である、ハルスの方がさきだから。「ウーデマンネンホイスの支配人たち」(一六六四)というのも「織物組合幹部」に似た構図である。前者は六人、後者は五人の人物を並べてゐる。「ウーデマンネンホイスの支配人夫人たち」(一六六四)は五人の老婦人を並べた繪である。

兵士たちの群像はやはり似たやうなのが沢山ある。何れも大勢の人物を描いてゐる。例へば「聖ヨリスドウーレンの将校の食事時」(一六一六及び一六二七)、「クルフェニールスドウーレンの将校の食事時」(一六二七)、「クルフェニールスドウーレンの将校の集會」(一六三三)、「聖ヨリスドウーレンの将校と下士官」(一六三九)など同じような題材で構図も大体同じと言つてよい。個人の肖像では「ヤコブ・ツァファイウス像」(一六一一)、「ニコラ・エス・ファン・デル・メール氏」(一六三二)、「コルネリアの像」(一六三一)など。かういつたブルジョアの像ばかり描いたのである。

この美術館は繪の陳列ばかりでなく、ルネッサンス時代の室内のモデルなどもある。モデルといつても小さい模型ではなく実物である。大きながらんとした部屋がマントルピースなども昔のままて保存されてゐるのである。この建物は古いもので、表に一六〇八と書

いてある。そのファサードが杉形に煉瓦を組上げた特徴のあるものである。中庭に渾天儀が置かれてある。これも其の頃のものであらう。

さつき電柱にポスターの出てゐた六月何日から九月何日とかまでの特別展覧はプッペンだったから其処は見るのをやめた。繪はがき少しとオランダ語の目録を買つて出る。三時を少し過ぎたところだ。バスで駅前へ出てアムステルダムへ帰る。

中央駅前の橋の上にアコーディオンを弾いてゐる爺さんがゐる。帽子がおいてあつて犬が番をしてゐるが、錢はいくらも入つてゐない。十セント入れる。このあひだも入れてやつたのだ。例の茶店でコーヒーを呑み新聞を読む。

ダムラックを歩いて百貨店を見たり、カルヴァストラートの時計屋だの土産物屋などをひやかす。時計の発明者ホイヘンスの生國であるこの國では時計が発達してゐるかと思つたが、いいのはやはりスイス製らしい。もつともホイヘンスが考案したのは柱時計で、懐中時計ではなかつた。もちろんこの國でできたのも沢山あり、立派さうなものもあるが性能がどうかは分らない。とにかく時計屋は沢山ある。

レンズ磨きはオランダに早く発達したのである。ホイヘンスが自分で磨いたレンズはライデンで見えて来た。哲学者のスピノザがレンズ磨きをしてゐたことは有名な話だ。眼鏡屋を覗いてみたが特別すぐれたのも見当らなかつた。ために或る眼鏡屋へ入つて　それはスペツィアル・オブティシアンと書いてある店だつた　上の方が遠くを見るので下の方が讀書用のコンビネーションができるかときいたら、下の方に圓く讀書用に凸レンズに磨いてあるのを持つて来た。自分が意味したのはそれではない。上半と下半が別々のレンズで、両方の断面を磨り合せにして密着させたものだ。これはうまくやれば継ぎ目が余り目立たないやうにできる。これはむろん日本でもできるし、新しいものでもない。中学生の時分に上が近眼鏡で下が素通しのを東京で買つて来た同級生があつた。その頃は合せ目がひどく目立つので、さういふのを知らない茶目の同級生がひびが入つてゐるとはやつたてると、本人はかういふのだと言つて得意にな

つたものだ・それでこの式がオランダでどの程度にできるか試してみようと思つたのである。一枚のレンズの下部を別の度に磨いたものでは各個人の眼に合うやうに磨かなければならない。種々の組合せを作つておけば近似的に合ふのがある筈だけれども、それには相当多数のものを用意しなければならぬ。二枚合せたのを使つてゐる人はつひぞ見かけなかつた。この先進國も近代技術にかけてはもはや席を譲つてゐるのである。

カルヴァストラートでケースを一つ買つて帰る。丁度ひけどきで電車が混んだ。ケースを持つてゐるので人に押し当つたりしないやうにするため汗をかいた。二週間入浴しないので臭くないかと心配になる。明日はパリで垢を落してやるんだ。

宿へ帰つたらクリーガー教授からはがきが来てゐた。クリーガーさんはユトレヒトの東洋学の教授で先年文化使節として日本へ来てゐた。わが科学史学会と医学会と連合で同教授を招き話をしてもらつたことがある。長崎の出島の話がされた。その席で少し話を交へ名刺を貰つてあるので、今度機会があつたらユトレヒトへ訪ねてお礼を言ひたいと思つたが中々時間がなかつたし、休暇で何処かへ行つてゐるかとも思つた。それで数日前ユトレヒト大学宛にはがきで挨拶を送つてあつたのである。今日貰つたはがきを見ると住所はライデンになつてゐる。さうしてあなたのはがきがユトレヒトから廻送されて来たので遅くなつたとある。是非会ひたいから都合を知らしてくれとあつて、電話番号と在宅の時間まで書いてある。そこで帳場へ行つてライデンの電話はすぐ出るかときいたら、すぐのこともあり数十分かかることもあるといふ。とにかく申込んだ。すると五分くらゐで出た。はがきを貰つたが明日パリへ立つのでお訪ねできない、土曜日にライデンへ行つたのだが、そのときはあなたがライデンにお住ひとは知らなかつたと話す。教授は出島の資料が最近東京から届いたなどと言つてゐる。それから明日の予定はどうかと言ふから、午前銀行へ行つたりなんかにして一時頃宿を立つと話す。それでは日本の皆さんへよろしくといふことであつた。

夕食後荷物を片づける。それからホテルの勘定を払つたあとオランダの金を上手に一文残さず使ふ計畫を立てる。一文残らずと言つ

てもそんなに無駄な金があるわけではない。つまり半端を有効に使ふための計畫である。

八月二十四日

少し曇つてゐる。ダムラックのアムステルダムシエ・バンクへ行き、旅行手形をオランダの金に換へてもらふ。さつきホテルで聞いて来た払ひの分と、ホテルから航空會社まで行く自動車代を差引く。このあひだはタクシーはないと言つたが、さつき立つときタクシーを頼むと言つたら、承知した。先達つては面倒くさがつたのだらう。それから昨日クリーガー教授から葉書が来てから少し鄭重になつたやうな氣もする。タクシー代をホテル代に含めてくれないかと言つたら駄目だといふ。それではライドシエ・プレーンのKLMまでいくら位だらうときくと、ニグルデンといふ。こちらには予算といふものがあるのだ。それでよろしい。

あといくらか残つてゐる。すぐ前の百貨店へ入つて少し買物をする。先達つて見ておいたアムステルダム、マルケンなどの文字と繪模様を三色くらゐに染め抜いた布片を少し買った。それから封筒を少し買った。外へ出て新聞を買ひ宿へ帰る。

勘定を払うつて暫く休み一時に宿を出る。ポルティエがこれからロンドンかときく。いや、パリだ。パリはいいですね、私は二年あましたと言ふ。この老ポルティエもむろん英、独、仏を操るのである。また行きたいがエキスペンシヴで、といふ。もう用のないオランダの銀やニツケルの小錢をやつたら、「サンキュー・サー」と言つた。実は余りに少しだつたのに。こちらは税関へ置いて行く代りにやつたのだ。

タクシーはニグルデンはしなかつたが、用意のニグルデン半の札をやつた。まだ一グルデンがある。もうオランダの金は要らないわけだから近所の煙草やへ入つて、何でもいいから一グルデンの煙草をくれと言つと、二十本入りの　こちらのはみな二十本だ　のスリー・キャッスルを寄越した。いままで多くは二十本七十五セントのトロフィーというコルク口のを吸つてゐたのだつた。

待合所で暫く待つてゐると先づロンドン行のバスが出て、二時近くになると我々の番になつた。バスの前の方へ乗り込む。今朝は曇つてゐたが晴れて来た。日が射すとバスの中は少し暑い気味だつた。初めのうちは歩いたことのある町を通り、やがて郊外に出る。遠くに風車のある景色が見える。やがて飛行場へ着く。

旅券や税関検査は簡単であつたが、両替の傳票をしらべていくら金を使つたか見てゐた。よくこればかりで十日過ぎたと感心してゐるのかも知れぬ。乗り込むとき大版の立派な雑誌やうのものを呉れた。飛行機会社の廣告だがスウィスの写真などがあるから捨てずに持つて行く。持てる國はさすがに異つたものだ。

飛行機は定刻二時三十五分に出た。小雨が降つて来た。しかしほんのぱらぱらで直き止む。牧場が見える。牛が群れてゐる。あのビール樽のやうなお婆さんを嫌が上にも太らせるために。それもだんだん小さくなる。川がある。船が見える。高度は千メートルとちよつとらしいから陸地の様子がよく見える。褐色の屋根が見える。

飛行機は空いてゐた。約半分は空席である。自分のすぐ隣りは空いてゐる。少し雲が出て来て視界を閉ぢる。私もしばらく目を閉ぢた。なんだか涙が出さうになる。あの領事館の婦人館員の親切がしみじみと思ひ出されたからである。何という行き届いた親切なのであらう。私はファン・ホツホのマダム・ルーランの繪を出してはがきを書いた。名前をきくことは遠慮したあの婦人館員ではなく、自分のうちへ書くより仕方がなかつた。さうして私の感情のはけ口を作つたのであつた。それでもこぼれさうになつてゐた涙はたうとう頬を傳はつて来た。

オランダよ、さようなら。招かれざる客は早々に退散するに如くはない。

